

佐多稲子とロマンティック・ラブのジレンマ

野本, 泰子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494520>

出版情報：比較社会文化研究. 11, pp. 93-100, 2002-03-15. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



佐多稲子とロマンティック・ラブのジレンマ

野 本 泰 子

はじめに

佐多稲子の「くれなゐ」という作品は、性役割の問題を女性の立場から克明に描いたものである。主人公明子のジレンマは、簡単に言えば、作家・妻という二重の性役割から生じる二重負担であるが、ロマンティック・ラブ（＝恋愛結婚）という要素が加わると、性役割はさらに複雑なジェンダーの問題の様相を呈する。明子のジレンマは、ロマンティック・ラブのジレンマでもあった。「くれなゐ」の描写を分析すると、佐多稲子がいかに今日のジェンダー的見方・考え方に近かったかが分かるのである。本稿は「くれなゐ」がいかにジェンダー的な視点を備えた作品であったかを論証する。そしてその論証を、「くれなゐ」は性役割の何にこだわりの、どのように描写したかということ进行分析することによって、特にロマンティック・ラブのジレンマに焦点を当てることによって行う。本稿は、「性役割」²、「ロマンティック・ラブ」³、「ジェンダー」⁴を主要なキーワードとして「くれなゐ」を読み解くことを試みて行くが、この時ロマンティック・ラブ・イデオロギー⁵などフェミニズムおよび社会学の知見も援用していく。

1. フェミニズムの流れと性役割

「くれなゐ」を性役割、ジェンダーというフェミニズムの主要なキーワードで読むことは、また、「くれなゐ」という作品およびその作者である佐多稲子をフェミニズムの流れの中に位置づけることでもある。「くれなゐ」を読むに先立ってここではまず、フェミニズムの流れを、さらに的を絞れば、性役割がキー概念として注目されることとなった第二波フェミニズムの流れを概観しておきたい。1960年代後半に始まる「第二波フェミニズムは、近代的性別役割分業に批判の矢を向けたことで、第一波フェミニズム⁶と区別される」。さらに第二波フェミニズムの中には女性学の創出からジェンダー研究へとという流れがみられる。江原由美子は第二波フェミニズムを三つに区分し、「女性

学創出期（1970年代末～1980年代前半）、フェミニズム理論導入期（1980年代半ば～1980年代末）、ジェンダー研究創出期（1990年代）」⁷としている。女性学の研究は、く家庭内の固定的な「性役割」を維持したままの女性の職業参加は女性に職業上の「役割」と家庭内の「性役割」との「役割葛藤」をもたらしていることが多いこと⁸を明らかにした。また女性学は、「男の性役割が優遇され、女の性役割は低く位置づけられるという、性役割の優劣関係を暴露した」。さらに井上輝子は、「良妻賢母思想」は「日本版性役割思想」であったと述べている⁹。「良妻賢母」は、女性のひとつの理想的な生き方とされるが、小山静子は、それは現代も「死語」ではないと述べている。「専業主婦」という言葉が、女性の性役割を象徴するものとしてあるが、現在尚、「専業主婦」擁護論／バッシング論¹⁰なるものが繰り返されている。また戦後の「主婦論争」は主婦を巡っての論争であった。ところでフェミニズムの流れの中で、ジェンダー概念の導入は性役割をみる画期的な視点をもたらしたのであるが、それまでの性役割論においては、性役割をく男女が「自発的」に選択した相補的役割関係として描き出す傾向があく、くしばしば男女間の「権力関係」という、より大きな社会構造を「見逃してしまう」のであった¹¹。ジェンダー概念の導入により、「ある特定の社会における女性、男性のありかたは、その社会におけるジェンダー関係を構造化している社会構造との関連で明らかにされなければならない」¹²と考えられるようになり、よって、ジェンダー概念はフェミニズム理論の「新しい発展」をもたらしたのである。江原由美子は、くこの現代社会における男女間の利害対立や支配－被支配関係を、フェミニズム社会理論においては一般に、「家父長制」という概念によって把握する¹³と述べている。フェミニズム社会理論の二大潮流を見るならば、一つはラディカル・フェミニズムで、それは、く性愛関係、夫婦関係にある男女の間に性的な支配－被支配関係があることを主張した¹⁴。二つとしてはマルクス主義フェミニズムであり、それは、くこの支配－被支配関係の「本質」を、男性による女性の労働の搾取に見

出した¹⁴。江原由美子は、ラディカルフェミニズムは性愛に関する制度としての結婚(恋愛結婚)が、「女性の身体・セクシュアリティ・精神を拘束していることに焦点をあてている」¹⁵として、「女性の経済的自立や自己実現の可能性や精神的自立」が脅かされることを批判していると述べている。本稿は佐多稲子の「くれなゐ」を中心として分析することにより、主人公明子の葛藤、つまり、良妻賢母思想を内面化し、恋愛結婚を生きる明子(=佐多稲子)¹⁶の妻意識と、作家であることとの葛藤に焦点を当てる。そして、この葛藤が、明子と広介というたぐいまれな強い愛着で結ばれた夫婦にあってはより激しいものとなっていることを重くみて、性役割と愛情の関連性に注目して分析を進める。女性の二重負担に愛情が介在することにより、女性が心理的影響を受けることを指摘した社会学及びフェミニズムの知見のいくつかを拾ってみるならばまず、『女性問題キーワード』は「性別役割分業」の項の中で愛情に関する部分について、「食事をつくる、他者の世話をするなどの女性の性役割は、男女や家族の間の愛情表現として期待され」¹⁷ると述べている。社会学者、アンソニーギデンスは、「女性たちにとって、ロマンティック・ラブという夢は、残念ながらほとんどの場合、家庭生活への容赦ない隷属をもたらしていった」と述べ、また、「ロマンティック・ラブにたいする抑圧されたこだわりは、明らかに主に異性愛の男女に見いだすことができた」と分析している¹⁸。日本のフェミニストでは、駒尺喜美が『「智恵子抄」は光太郎の贖罪のうた」という論文で次のように告発している。「女にとって愛とは何かというと、自分を放棄して、自分のやりたいことを犠牲にして男に尽くす、つまり、奉仕することなのである。だから、必然的に女は、愛を持つと同時に、仕事とか、自分の表現意欲とかをもった場合に、必ず分裂していく、そういうところに追い込まれる。その悲劇の典型が千恵子であったのではないだろうか」¹⁹と。性役割への批判を愛情と関連づけて語るとき、それは「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」の口調を帯びるだろう。しかし、本稿はロマンティック・ラブそのものを否定的、あるいは肯定的のいずれに捉えるものでもない。ただ、ロマンティック・ラブを主要な分析概念としてとり入れ、本稿の論証を試みるのである。ここで「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」とは何かを確認しておきたい。小谷野敦は「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」を次のように説明している。

「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」とは何か。それは、一般に、恋愛・結婚・性交の三位一体体制と呼ばれ、結婚のためには恋愛が必要であり、性交のためには結婚が必要である、という考え方である。そし

て、このイデオロギーによって女性は結婚という軌へと追い込まれるのだが、その際「ロマンス」によって女性は「ロマンティック・ラブ」への憧れを内面化するというもので、男性支配社会による近代的な女性の囲い込みの装置として、西洋近代に発して漸次日本などにも広まったものとして捉えられている。²⁰

「くれなゐ」の明子の葛藤も「ロマンティック・ラブ」に色づけられている。文学作品として、女性の性役割の問題を明確なテーマとした最初のは田村俊子の「彼女の生活」²¹であるが、詳しくは第3章において「くれなゐ」の論証に援用する。これまでの佐多稲子論あるいは「くれなゐ」論の中で、関心の在処が本稿と近い研究論文としては、小林美恵子の〈「くれない」論—〈女房〉の要る夫婦²²と谷口絹枝の〈佐多稲子「くれない」論²³が挙げられる。詳しくは第2章と第3章における論証の過程で触れることとしたい。

2. 性役割と「くれなゐ」のテーマ

ここでは、「くれなゐ」は性役割の何にこだわったのかという点を明らかにしたい。先に述べたように、確かに「くれなゐ」のテーマは女性における性役割の問題である。しかし、作中で問題視されているのは、単なる、女性の二重負担の問題ではない。妻という性役割と、作家として生きるという二重の役割を要求された女性の内面的葛藤そのものに焦点が絞られている。その葛藤は、妻らしく振る舞ってしまう自分とプロレタリア作家としての成長を望む作家意識とに自己分裂するところに生じている。明子の「自分の成長が、女房的なものに掣肘されそうなの」²⁴という述懐が葛藤の内容を如実に語っている。「女房的なもの」とは、作中に出てくる明子の「良妻賢母」的な妻意識を表す言葉である。明子(=佐多稲子)は、結婚当初は作家になる意志のなかった女性であり、作中では「でも、私だって、きっといい奥さんになっていたわね。もし仕事さえしていなければね」と言っている。佐多が7才の時に亡くなった母についての記述を見ると、佐多は自分らしい「良妻賢母」的要素と、恋愛のためには一途で情熱的な面を持ちあわせた母について憧憬を持って語っている。母が亡くなる直前に、小学校へ入学したばかりの佐多に送ってきた手紙には、「ヨクベンキョウヲシテヨイオクサンニナルヨウニ」²⁵と書いてあったというが、佐多は小学校で勉強のよくできる向上心豊かな子どもに育っていく。恐らく佐多稲子は、母親の遺言である「ヨイオクサン」になることを大切に内面化していったと考えられる。

「くれなゐ」を、明子の内面的葛藤に注目して分析を試

みているのは、谷口絹枝と小林美恵子である。谷口絹枝は、「女房的なもの」を「近代日本の家族制度を頂点とする因習、社会通念、社会制度・秩序などの女性をとりまく負のしがらみ」と述べ、く作家の仕事をとおして自己確立をめざす明子にとって、「女房的なもの」がいかに障害として作用するかが明子に理解され、かつ告発、抗議されている²⁷と指摘している。小林美恵子は、「明子を苦しめるのは、家事と仕事の二重労働の辛さなどではなく、夫と同じ空間で生活することによって発生する、自分の人格を圧縮されるような目に見えない圧力の存在である」と述べ、「彼女はつまり、知らず知らずに自分が女房的、すなわち家父長制下の妻的ふるまいをしてしまうという、その自然な流れが許せないのである。……それに逆らえない自分というのが、何より彼女を苦しめる」と分析している。上記二論文は、「くれなゐ」のジェンダー的特徴をも指摘するものとなっているが、本稿は、「くれなゐ」にジェンダー的見方、考え方があることをさらに強調し、論証するものである。勿論、明子の自意識の問題を指摘する点で本稿と視点が似通っている論文は上記二論文以外にも挙げることは出来る²⁸。しかし、「くれなゐ」は、とかく、性役割・二重負担そのものへの抗議ととられがちである。「くれなゐ」は、性役割そのものを告発する「男性への抗議」²⁹の書であるよりはむしろ、「女性の苦悩の書」²⁹であるというのが適切である。。佐多は「怖ろしき矛盾」³⁰という一文で、「くれなゐ」を書くに至った心境を次のように述べている。「多くの人にとって、職業と家庭生活の問題は可成り重大な関心事になっている」が、「(私は、)このような一般的なことを書く気力を持っていない」と。しかし、「私事をちょうちょうする辛さをあえてし」て書くのは、「私の私事の中にいささかの問題を含んでいる」と考えるからであるという。そして、佐多自身二重負担そのものについては、「仕事を持つ女が家庭生活と本質的に相容れぬものを持っているなどという考えには私は真っ向から否、と叫ぶ」と一般論としては家事と仕事の両立は可能であるとの意見を表明している。だから、佐多稲子が「くれなゐ」で拘っているのは、内面化された妻意識であり、非難の矛先は外見上そのように見えるとしても夫とか男性に向けられているのではなくて、妻意識を引きずる自己自身に向けられているのである。そもそも性役割は、解決困難で複雑な社会的背景を持つジェンダーの問題として、今尚その解決が模索されているのである。であれば、性役割について自己の妻意識に目を据えた佐多稲子の問題意識の新しさ、強さに注目したい。明子が夫に「女が出来」るに至った経過についてもそれをあくまで自己の問題と考えていることは次の言葉でも明らかである。

私は自分がいい細君でなかったなんて思わないわ、ただそれが、そのことが自分で厭になったんです。あなたに女が出来たからって、あなたにだけ罪は負わせはしないわ。これは私自身の悲劇なんです。(94頁)

この見方・判断は明子(＝佐多稲子)に一貫している。しかし、明子の自己に向けられた苦悩は、夫広介には理解されているようでいて尚十分には分かってもらえない。窪川鶴次郎は「くれない」事件の終息近く書いた一文で、「私が世話女房としての生活を稲子に多少でも要求していたとすれば、(稲子の作家としての仕事は：筆者注)恐らく成し遂げられなかったに違いない」³¹との理解を示しているにもかかわらず、「なんだった、小説なんか書いたんだろう」という明子の言葉に対しては怒りを露わにしている。

黙っていればいい気になって。自分だけが悲劇の主人公だと思っている。いつもそうなんだ。俺はいつもお前に迷惑だけかけて、ノホホンとして来たということになるんだ。(94頁)

一応の理解がある夫においても明子の矛盾はそのままに理解され難いのである。つまり、男女の性差の問題は、相手に理解され難いことの一面を物語っているといえよう。目に見える性役割としては分かっている、微妙な、心理的作用にまでは理解が行き届かないのである。性役割の問題への考察を深めるものとしてジェンダー概念の導入があることは既に述べたが、明子の葛藤は、今日のジェンダーの概念を導入して初めて把握できるレベルのことと言えるのだろうか。ともあれ、その時代に佐多は、性役割に対して、それとは知らずに、ジェンダーの視点による切り込みを既に入れていたことになる。ジェンダー概念のない当時であってみれば、佐多に、その立ち向かう相手の正体が掴めていなかったのは当然である。「二人の矛盾」(48頁)は、「両方が作家だという本質的なものに根ざした」(同上)矛盾であり、又、「今の暮らしが悪いから」(同上)と明子に判断され、く「転向時代」の波く(49頁)が葛藤を喚ぶ遠因として考えられるのである。それは「空気のような執拗さで人々を侵し始めていた」(同上)と描写されている。明子が闘っているものの正体は、「空気のように」捕らえどころのないものであって、それは、作家としての客観的で、覚醒した眼だけが捉えうる妻の心の動きでもあった。ジェンダーも当時であっては「空気のように」感じられるものであっただろう。「くれなゐ」はジェンダーという言葉は用いていないが今日のジェンダー的視点を既に持っていた作品と言えよう。江原由美子は、ジェンダー概念の創出について次のように述べている。

いかなる概念の創出にも、その背後にはその概念を生み出した「問題」ともいべきものがある。すなわちそこには、その概念を創出することなしには描き出せない「現実」が、あるのであり、そのような新たな「現実」を描き出そうとすることは、当然にもその概念を創出する以前に描かれていた「現実」に対抗することである³²。

江原由美子の見解によれば、佐多稲子が「くれなゐ」で描いた内容と、描いた行為は、ジェンダー創出以前の「現実」との壮絶な闘いであり、明子の葛藤は、ジェンダー創出への胎動とも解せられる。そしてそれは、実際の創出に先立つこと半世紀以上前のことであった。作中にジェンダー的視点が示される箇所として、明子が髪を切るところがある。明子には、「女の髪の形というものは……その人の人柄を敏感に現している」（58頁）と感じられ、「おどおどと、古いものに未練げに気兼ねをしている気持が、曲もない、ちんちくりんの髪の形にみすぼらしく象徴されているよう」（同上）に思っ、「自分の過去をすっぱりと脱ぎ捨てるような気持で」（同上）髪を切ってしまうのである。「くれなゐ」に限らず、佐多稲子は、今日のジェンダー的なものの見方をする作家である。佐多が佐多稲子全集第18巻の「あとがき」で述べている「私が女であるということは、私の書くものの全体に現れているのだろう。私という人間の性格と考えとは別に、先ず女ということは前提にあるにちがいない。……男なら、おれは男だという必要のないことが、女にはある。……とにかく私は、女・女と主張してきた。これは私のイデオロギーであることでもあって、自分のこの態度を否定的には考えない。」（475頁）という言葉は、佐多稲子のジェンダーへの関心とこだわりを示している。男にはなくて女にはある「私は女」と言う必要を指摘すること自体鋭いジェンダー的な捉え方である。

3. 性役割と「くれなゐ」の描写

さて、ここでは「いかに描いたか」を分析しよう。それはつまり、第1章の分析の結果を踏まえるならば〈「くれなゐ」は性役割による葛藤をどのように描いたか〉という問いに答えることである。明子の葛藤をよく見ると、先にも述べたように愛情が深く関与していることが分かる。それで本稿は、ロマンティック・ラブを手掛かりとして「いかに描いたか」という点を論証する。そしてその論証を二方向から行う。一つは、性役割による内的葛藤の描写をロマンティック・ラブを通してみていくことであり、他の一つは、「くれなゐ」の描写を、同じくロマンティック・ラ

ブと性役割の繋がりをテーマの中に描いている「彼女の生活」の描写との比較において考察することである。小林美恵子と谷口絹枝が性役割による葛藤と愛情の関連性についても指摘している。小林美恵子は「このように性役割分業は愛情の問題と複雑に絡み合っており、男と女がお互いに、凝固まった性役割意識を改革しないかぎり、いつまでも解決されない問題である。『くれない』は、男と女が抑圧するものとされるものの関係を打破できない限り、愛情の面にも純粹さは保ち得ないことを鋭く告発した作品なのである」³³と述べている。谷口絹枝は、「愛情と仕事の統一に挫折」した要因として、く愛情と仕事の両面に根深く作用していた「女房的なもの」の存在が否応なしにクローズアップされてくる³⁴と述べている。本稿の分析の独自性を示すとするればそれは、ロマンティック・ラブにおいて互いに影響関係にある「女房的なもの」・仕事・愛情の三者の中、愛情を重くみて、愛情に焦点を合わせて分析するところにある。先に触れたように、社会学の知見は、アンバランスなジェンダー関係の下における愛情は、そのジェンダーのあり方に一定の影響を及ぼすことを述べていた。そして、この一方的な流れによる抑圧を、フェミニズムはロマンティック・ラブ・イデオロギーとして批判することにも既に触れた。ここで行うことは、文学ではそれがどのように描かれているかをみることである。「フェミニズム批評の可能性」と題する座談会で、長谷川啓は、く『くれない』のテーマは、「夫を愛していながら、独り暮らしの自由さを希ませる矛盾」であ³⁵と述べているが、愛していながら破綻を招くということは「矛盾」であろう。つまり、「ロマンティック・ラブのジレンマ」となる。まず、明子（＝佐多稲子）の「ロマンティック・ラブのジレンマ」がどのように生じていったかをみることにしよう。明子と広介の結婚は「ロマンティック・ラブ」であった。佐多稲子が娘時代に読んだ『近代の恋愛観』（大正11年刊）の著者厨川白村は、日本に「恋愛結婚イデオロギー」（「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」）を開花させた人物である³⁶。佐多は良妻賢母的な妻意識と、白村の霊・肉合一を説く恋愛観を内面化していたと考えられる。佐多のロマンティック・ラブにおいては最初平凡な妻として出発したが、後に夫婦共に左翼運動に入りプロレタリア作家になった。そして、「ひととおりでない」（61頁）辛い十年間の努力の後に、「二人が一緒に暮らしていけない矛盾」（同上）に出会う。それは明子の側に「桎梏」として意識されることであった。この矛盾は明子がプロレタリア作家として成長を遂げることによって露わになったことであった。明子は独りになったときの自分の生活を「私は気持が大きく遅くなり仕事を計画的に進めてゆくだらう、私は下らぬ反撥に自分を縛りつけなくてもよい。私の気持を矮小にするもの

は私の生活からなくなる」(57頁)と夢想している。しかし、作家としての生活を矮小にする妻としての心遣いは広介への愛情と表裏一体をなしていた。明子の作家としての眼が、愛情が妻意識へ及ぼす作用を次のように捉えている。

広介の生活を、いつでも真っ先に立てていた。偶然のように自分が広介より先に作家になってしまっていたが、そのことは却って明子の妻としての心づかいを大きくさせるばかりであった。いつでも家庭的な些事から広介を守ろうとし、彼の俗世間には当てはまらぬような性質も、彼の詩なのだとおもう、純粋に保とうとして努力した。(61頁, 62頁)

この明子の心遣いを、佐多稲子の聞き書きである『年譜の行間』は、さらに詳しく述べている。

窪川さんの仕事を大事に思っていたし、大切にしていた。あたしは普通の女房ではなかったけれども、家事なんかは全部やらなければならないと思ってやっていた。だから、窪川さんには、させなかった。亭主にも台所をさせろ、子どもの守もさせろというのが今の主張でしょう。でもそれがあたしの場合、違っていた。あたしの感覚の中には、そういう家事にまみれさせたくないという、家事にまみれると、芸術的な素質みたいなものが、損なわれるのではないだろうか。だからそういう家事や世俗的な親子感情にもまみれさせたくないと思っていました。それは自分も家事にまみれたくないと思っているんですよ。だから窪川さんだけにそうするつもりでもないんですが、必然的に女のあたしにかかってきて、窪川さんにはそう思いながら、自分は一生懸命家事にまみれて、それで七転八倒して。阿呆なことです。(194頁)

ロマンティック・ラブにおける妻の愛情による心遣いが、妻に対するジェンダー関係の強化として働くという意味のことを、菅野聡美は「しかし、恋愛関係においても上下・優劣関係はつきまとうだろう。白村らは、現実存在する男女の優劣関係について無自覚ないしは楽観的だった。このことが恋愛結婚論を現実追従と抑圧に向かわせることになった」³⁷と述べている。また、竹村和子は、ジェンダーによる抑圧とその抑圧の生成について、ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」の概念を用いて説明を試みている。竹村和子は「ハビトゥス」を次のように説明している。

ブルデューによれば、ハビトゥス（規範システム）は、「集団のすべての特性、およびその特性と他の集団の

特性についての判断を生み出す生成原理」であり、その集団の成員に対して「道理になかった慣習行動を生みだし、またこうして生みだされた慣習行動に意味を与える知覚を生み出す」ものである（『ディスタンクション』1979）。このようにハビトゥスは、自己を外部から支える「生活様式として機能して」いるが、同時にそれは、生活様式を成り立たせている自己の慣習行動を統一し生成する原理であり、慣習行動を内発的で自然なものとなす自己の知覚や意識を組織化するものである。³⁸

「ハビトゥス」という概念を導入することによって、明子の葛藤も、妻意識・仕事・愛情の相互関係も説明できるかも知れない。というのは、ロマンティック・ラブも良妻賢母思想による妻意識も共に、筆者には社会的、文化的につくられたもの、つまり一種のジェンダー的な慣習と考えられるのであり、さらに、「自己の慣習行動を統一し生成する原理である」というハビトゥスの特徴をも備えているように思えるのである。文学とは別に、あるいは、文学と社会学の境界を外したところで「ロマンティック・ラブのジレンマ」を説明し、論じることが出来ないだろうか。稿を改めて挑戦したいと考えている。

次に、「くれなゐ」の描写を「彼女の生活」との比較において考察してみたい。「フェミニズム批評の可能性」の座談会での論者が「彼女の生活」の特徴を幾つか挙げ、主としてフェミニズムの立場から評価している。「でてきうる問題を全部とらえている」、[愛に絡めとられていくところを田村俊子はしっかり書いている]という批評は、フェミニズムの立場から作品を高く評価した言葉である。しかし、「たしかに文学的に見れば、骨格だけはしっかりしているが肉付けなしというところがある。」という評価と「頭の前ではそこまで書けるんだけど、自分の感情のところではそうはなっていない。」という批評は、文学作品としても、また、ジェンダーの視点の有無からしても到底高く評価しているとは取れない。「彼女の生活」が早い時期に性役割をテーマにしたことは女性解放文学として高く評価されている。しかし、両作品は性役割の問題について同じ意味のことを書きながらその伝え方が大きく異なっている。「彼女の生活」が「頭の前」で書いた作品ならば、「くれなゐ」は心に響く作品と言えよう。「くれなゐ」の愛情の描写の引用は既に示したが、同じく、愛情が女性に性役割を自発的に受け入れさせ、強化するものであるということ。「彼女の生活」はどのように描いているかを見るために少し長いけれど引用してみよう。

然も新田に対する優子の愛は、新田が自分を善良な妻

として求めやうとするある一時の要求にも背向くことをさせなかつた。新田の満足の前には、善良な妻であることを願ふやうな媚びが、何時ともよく彼女の心底に滲みひろがって居る事を優子は自身に感じてゐた。それは優子に取っては恐ろしい妥協の最初であつた。優子はあまりの苦しさに、自分の生活を最も正しく解釈し真実に理解して見やうとした。家政の仕事における自分の無能と、無能にも拘わらず家政の仕事を処理しなければならない自分の境遇と、良人へ対する愛と、良人の仕事に対する理解と、—それから最も大切な自分の芸術と、自分の自由と、自分の生がだんだんに結婚によって圧搾されてゆく苦しさ—と優子は一つづつ物を算用するように考へたり、書きつけたり批判したりした。³⁹

「彼女の生活」では優子の新田への愛は観念的な表現に終わっている。「くれなゐ」では、明子と広介の愛は具体的かつ身体的・感覚的に描写されていて実にリアルである。まるで色鮮やかな動画でも見るような次のような描写がある。

熱っぽくうるんだ視線で明子は広助を見上げた。彼女は肌を脱ぎ、肩を露わに出して鏡台へ向かった。そして広助を呼んだ。化粧水を広助に渡し、それをうなじのうしろへ塗って呉れるように頼んだ。鏡の中で彼女の視線がまるで反射するように広助を見ていた。広助が悲しい愛撫の言葉で、明子の肩に接吻をした。明子は身をくねらせた。(63頁)

以上両作品から、ロマンティック・ラブにある夫婦の姿を一つずつ引用してみたが、両者の表現の特徴がそれぞれ看取される。この表現の違いは何によるのだろうか。勿論、二つの作品が同じということはある得ないし、それぞれ書かれた状況・時代・背景や作者の特質によって異なるのは当然である。しかし、両者の表現の違いを特徴付けているものが他にあるとすれば、それは何だろう。それは作者の創作態度、創作方法にあるのではないか。この二つに関して佐多稲子にはあって、田村俊子には無かったものといえ、それは左翼思想であり、明確な文学理論であつた。佐多稲子が拠所とした文学理論はプロレタリア文学理論であり、それはプロレタリア・リアリズムであつた。「くれなゐ」の舞台は、日本プロレタリア作家同盟が解散した1934年から始まっている。そして「くれなゐ」のモチーフとなるいわゆる「くれない事件」は1935年夏のことであり、秋には一応の終息を見て、作品が書かれるのは1936年1月からである。まずプロレタリア文学理論とは何かを、蔵

原惟人の「再びプロレタリア・リアリズムについて」⁴⁰を参照してみよう。蔵原は、「唯物弁証法とはこの世界を認識しそれに働きかけるための方法論であつて、それは、プロレタリアートの世界観である弁証法的唯物論から引き出されたものである。」として、プロレタリア・リアリズムに次のような三つの要求を掲げている。

1. 「まず執拗な現実—事実から出発すること—これがプロレタリアリズムの第一の要求である。」
2. 「常に社会的・階級的観点からすべてを見てそれを描いてゆくこと。」「我々は人間をその複雑性の中に、その生きた形象の中に描かなければならない。」
3. 「個人の心理にまで沈潜してそれを示すことを要求する。」

ところで、佐多稲子は自己の創作方法について次のように述べている。

〈創作における唯物弁証法的方法とは、「あるがままに」ではなくて、あるがままの現象を通じて、その起こった必然をその本質へ入って解明する方法である。〉(『佐多稲子全集第16巻』, 52頁)

佐多の創作方法：〈我々プロレタリア作家は誰にでも観察されるものを通じて、実際の真のものを解明する本質を解明する。しかも同時に感覚的な具体性を、描かれたものの「直接性」を保有している—そしてそれと共にプロレタリアートの利益に変革させるような作品を描くべく努力している。〉

(『佐多稲子全集第16巻』, 54・55頁)

蔵原の文学理論と佐多の述べるところを照合するならば、佐多がいかに忠実にプロレタリア文学理論を実践しようとしていたかが分かる。そして、「くれなゐ」において佐多がプロレタリア文学理論を忠実に実践していたことは、当時佐多がプロレタリア作家であろうと努めていたことの証でもある。さらに「くれなゐ」はその書かれた動機として女性解放の意味も持っていたと考えられる。作中で、作家としての明子が目指したものとして、女性解放と革命思想が並立している。

もっと、もっと、豊富な人生へ突入してゆかねばならないのではないか。そしてそれを、私は欲している。飛躍する感情と、分厚な熱情を人生に、大衆の中に求めている。(35頁)

私は書くわ。女の、いろいろな苦しみや、悲しみを書くわ。ねえ、それでなければ私は救われないもの。ど

んなにたくさんの女がいろいろなことで苦しんでいるのか知れないのね。私は書くわ。(64頁)

女性としての自己の葛藤を描きながら「くれなゐ」執筆時の1936年の佐多に、尚プロレタリア作家たろうとする明確な姿勢が示されていると言えよう。そして何よりも作家としての生活を第一にして、作家であることに心を奪われていく明子(＝佐多)の様子に、革命思想に生きようとする強い決意が看取される。明子はプロレタリア作家に徹するためには、「つまり大衆の生活を描きたいという欲求のためには、生活のことは直接作家にとって問題になるのよ。だって、作品は嘘はつけないでしょう。生活感情というものは、殊に作家のように反応し易い人間にはてき面だと思ふのよ。」(24頁)と、作家という仕事と生活との統一を重視していく。そして生活に目を据えた時、問題になるのが女房的なるものであった。佐多は「婦人作家の故に」ではその決意を「プロレタリア作家の生活をこのようなものとして、自身の生活をそこに向けている私にとって、私はまず、婦人としての自分自身も引きずられ勝ちな種々な条件を目前にして解決してゆかねばならないのであった。」(72頁)と述べている。

プロレタリア文学理論と佐多稲子の文学論を照合し整理するならば次の二つのことが言えるだろう。第一に、佐多が「くれなゐ」事件当時および執筆時に、いかに忠実にプロレタリア文学理論を実践していたかということである。第二に、佐多稲子の描写をジェンダー概念のレベルに届くよう導いたのはプロレタリア・リアリズムではなかったかということである。佐多の言葉である「従って、「直接性、可視性、生きた生活のイリュージョン、これらの印象が保有されなければ作品は芸術作品とならないであろう」(ファジェーエフ)⁴¹ということは当たり前のことである」(「本質の上にかけられた覆い」、『佐多稲子全集第16巻』, 54頁)によっても、プロレタリア・リアリズムの手法がジェンダー的見方を可能にしたことが窺える。佐多が「芸術的感性の問題」(『佐多稲子全集第16巻』, 90頁)で引用しているのであるが、プロレタリア作家徳永直の言葉である「芸術的把握は、理論的把握とは異なった方法で、その秘奥へ達するのである」⁴²によっても、プロレタリア文学理論が「くれなゐ」の描写に関係があることが窺えるのである。

佐多におけるジェンダー的見方の発生の様子をまとめてみよう。1935年という「くれなゐ」事件当時の佐多は、作家であることを第一に考え生活を統一しようとした結果、日常生活において、今日というジェンダー的な事柄に気づくようになる。そして目に見えないジェンダーという相手との闘いが始まるのであるが、プロレタリア作家としての

成長と共に、作家の眼は「研ぎ」澄まされていき、自己の内面に映るジェンダーの影さえも見逃すことができなくなる。そして、佐多はジェンダーの森に迷い込む。プロレタリア文化運動は人間の解放と婦人の解放をもたらすものと信じて階級運動に邁進してきた佐多は夫と共に互いに「好く暮して来た」つもりであったが、十年間の「ひどい努力」の結果訪れたのは「二人が一緒に暮らしていけない矛盾」(61頁)であった。その時明子は不覚にも愛情を見過ごしてしまうが、後に取り落としたものの大きさに気づいた明子は原因を自己の「思い上がり」(72頁)とみて、物語は「人生的な敗北感」(104頁)で終わっている。ロマンティック・ラブ、「良妻賢母」的な妻意識、研ぎ澄まされたプロレタリア文学理論、この三者が明子(＝佐多)のロマンティック・ラブのジレンマを構成した。明子の場合夫婦共に作家であることは特殊ではあったが、それだけに鮮明にジレンマを炙り出すことになってしまった。なぜ佐多稲子にジェンダー的なものの見方が出来たかと言えば、佐多自身にジェンダー概念の創出に繋がるような体験・「現実」があったということ、さらに、「執拗な現実—事実から出発すること」を要求するプロレタリア・リアリズムという文学理論があつて佐多に「現実」を描写することを可能にし、そしてまた、佐多がそれを実践することに徹したことによるだろう。

おわりに

古くて新しい問題である性役割をテーマとした本稿を終わるに当たって、性役割分析の現状とその到達点の一端を示そう。鈴木由加里は「専業主婦という表象」で、現代の専業主婦擁護／バッシング論の対立の発展性を欠くことに關して、「専業主婦や働く女性を語るのであれば、その言説は、彼女たちをめぐる状況や家族の問題を解決するためでなければならないだろう。そのために必要なのは、専業主婦と働く女性を分断するような言説ではなく、既婚女性を語るにしても、そのパートナーから切り離してしまわずに、彼女たちをとりまく諸問題を分析することであり、十分な議論から生み出されるであろう実践的な理論なのである。」⁴³と述べている。本稿も、性役割分析の可能性を愛情という男女の関係性にあるとみた。しかしながら、本稿で簡単に触れたハビトゥスという概念も性差の問題を解くには魅力的な概念である。竹村和子は「わたしたちは新しいハビトゥスをはたして構築するなど、できるだろうか、……しかしおそらく、それは可能である。」⁴⁴と述べている。果たして将来、ロマンティック・ラブに生きる仕事を持つ女性の「怖ろしき矛盾」が無くなることあるのだろうか。

【注】

- 1 「くれない」は、1章から18章までが「婦人公論」の1936年1～5月号に、19章から24章までが「中央公論」(1938年8月)に「晩夏」という題で掲載された。「くれない」とも書かれる。本稿の引用は、『佐多稲子全集 第2巻』による。
- 2 「性役割」はもともと、英語の Sex Role の日本語訳である。社会的・文化的に規定されたものとの認識に立って、性役割、性別役割分担、性別役割分業などと表される。「日本のフェミニズム3性役割」(井上輝子他, 岩波書店, 1995年1月) 参照。
- 3 一種の学術用語で、「ロマンティック・ラブ・イデオロギー」から派生した。当事者の愛情のみによって恋愛関係を基礎づけようとする理念。『恋愛学がわかる』(朝日新聞社, 1997年7月), その他を参照。本稿では恋愛結婚とも表す。
- 4 セックスの差異のうえに構築される社会的・文化的な性差。本稿ではジェンダーの問題とは、ジェンダーが原因で起こる問題の意味に用いる。
- 5 本稿第1章の説明参照。
- 6 第一波フェミニズムは英米では、1860～80年代に始まり、1920年代に終息した。主に男性と平等の市民権を求める運動であった。本文の引用は、井上輝子「日本のフェミニズム3性役割」, 2頁, による。
- 7 江原由美子,『フェミニズムのパラドックス』, けい草書房, 2000年9月, 14頁。
- 8 江原由美子,「ジェンダーと社会理論」,『現代社会学11ジェンダーの社会学』, 岩波書店, 1995年11月, 43頁。
- 9 この部分の引用および内容は井上輝子他,「日本のフェミニズム3性役割」, 岩波書店, 1995年1月, 3頁。
「賢母良妻思想」は、明治の早い時期に儒教的女性観に対峙する近代的・西欧的思想として提唱されたが、明治後半期以後、公教育を通じて女性規範として不急、定着していった。
- 10 鈴木由加里は、専業主婦擁護論の代表として林道義を、バッシング論では石原里紗を挙げている。「専業主婦という表象」(「現代思想」, 青土社, 2000年2月) 参照。
- 11 前掲, 江原由美子,「ジェンダーと社会理論」, 44頁。
- 12 前掲, 江原由美子,『フェミニズムのパラドックス』, 30頁。
- 13 前掲, 江原由美子,「ジェンダーと社会理論」, 46, 47頁。
- 14 同上, 49頁。
- 15 同上, 48頁。
- 16 両者はほぼイコールで結ばれる。
- 17 矢澤澄子,『女性問題キーワード』, ドメス出版, 1997年3月, 19頁。
- 18 アンソニー・ギデンス,『The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism』, 1992, 松尾精文・松川昭子訳,『親密性の変容』, 而立書房, 1995年7月, 96頁97頁。
- 19 駒尺喜美,『「智恵子抄」は光太郎の贖罪のうた』,『フェミニズム・コレクションⅢ』, けい草書房, 1993年12月, 299頁300頁。
- 20 小谷野敦,「ロマンティック・ラブとは何か」,『愛の苦難』, 岩波書店, 1999年12月, 67頁。
- 21 田村俊子,「彼女の生活」,『中央公論』, 1915年7月。
- 22 小林美恵子,「くれない」論ー「女房」の要る夫婦ー, 日本女子大学国語国文学会, 1997年2月。
- 23 谷口絹枝,「佐多稲子「くれない」論」, 国文学別冊文集近代3, 1988年。
- 24 『佐多稲子全集第2巻』, 15頁。以下本稿は、佐多稲子の引用については引用の後ろに頁を記す。
- 25 佐多稲子,『年譜の行間』, 中央公論社, 1983年10月。14頁。
- 26 前掲 谷口絹枝, 38頁。
- 27 前掲 小林美恵子, 117頁。
- 28 長谷川啓は,「くれない」における明子の言説(『佐多稲子論』, (株)オリジン出版センター, 1992年7月, 85頁)の中で,「己の女房意識との葛藤」と言い表している。
- 29 「男性への抗議」,「女性の苦悩の書」のいずれも、宮本百合子の言葉である。『宮本百合子全集 第8巻』, 河出書房, 1952年10月, 428頁 参照。
- 30 佐多稲子,「怖ろしき矛盾」,『佐多稲子全集第16巻』
- 31 「生活と愛情」,『女性の言葉』, 高山書院, 1940年10月, 276頁。本稿は旧仮名遣いを適宜新仮名遣いに変えて記す。
- 32 前掲,「ジェンダーと社会理論」, 32頁。
- 33 前掲, 小林美恵子,「くれない」論ー「女房」の要る夫婦ー, 124頁。
- 34 前掲, 谷口絹枝,「佐多稲子「くれない」論」, 44頁。
- 35 「新日本文学」No471, 1987年4月号, 74頁。
- 36 藤井淑楨,「純愛の系譜」, 前掲『愛と苦難』, 61頁。および, 菅野聡美,『消費される恋愛論 大正知識人の性』, 青弓社, 2001年8月, 168頁169頁, 参照。
- 37 前掲 菅野聡美,『消費される恋愛論 大正知識人の性』, 159頁。
- 38 竹村和子,『思考のフロンティア フェミニズム』, 岩波書店, 2000年10月, 72頁。
- 39 前掲, 田村俊子,「彼女の生活」, 68頁69頁。
- 40 「芸術における現実主義的な態度」,『現代日本文学大系 54』, (筑摩書房, 1973年1月), 324頁。
- 41 1901～56。ロシアプロレタリア文学系作家の中心的存在。社会主義リアリズム論の公式スポークスマン。『新潮世界文学辞典』参照。
- 42 「現実と芸術性」, 前掲,『佐多稲子全集第16巻』, 90頁。
- 43 前掲,「専業主婦という表象」, 248頁。
- 44 前掲,『思考のフロンティア フェミニズム』, 81頁。